慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	知識人の概念と類型
Sub Title	The concept and types of intelligentsia
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1959
Jtitle	哲學 No.37 (1959. 12) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	The word "intelligentsia" has hitherto been used widely. Yet from the sociological point of view especially, it is still one of the most obsecure terms upon the meaning of which people have rarely agreeded. This is because the people do not share the same ground to appreciate the significance and implication of the above-mentioned terms. If we want to difine the concept of intelligentsia, we must pay attention neither to one's occupation nor academic career, but to his inner attitude as having advocated by T. Geiger. By saying "inner attitude" we mean the autonomy of mind, critical character and creation of culture. I shall begin by distinguishing cultured-man from intelligentsia. The formar is a man who only enjoys culture, but not necessarily posseses his own cultural ideal. Whereas intelligentsia is a man whose characteristics are based on an independence of thought and a disapproval of all sorts of external authorities which arise not only from the political power, but from those of mass of people, cultural tradition, mass-communication and so on. Furthermore types of intelligentsia are divided into those of two sub-classifications, I) critical (radical) and 2) affirmative (conservative). It is enough to say that both of them possess a positive attitude to this world or his ideal. However there exists an important difference of the attitudes between them. The former's attitude is represented of the attitudes between them. The former's attitude is represented by a courage to oppose against all the old-fashioned authority or thought, and later's is by a courage to endure his destiny.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000037-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

知識人の概念と類型

横山寧夫

絶対主義の王侯の前では道化のみが真実を語つた。彼はそのかぎり自由であり人気者であつたが、その言葉は無力であり宮廷の一時の慰みや笑い草にしかすぎなかつた。やがて人々が婉曲な諷刺に托しておづ〳〵と真実を語り始めた時代を経て、今日人間の自由を説き、社会的権力に対抗して真実を語るものは少からざる勇気を必要とする代りに民衆からは英雄に祭り上げられる。然し彼は依然として孤独である。何故ならば彼は敵にも味方にも批判の対象を見出すからである。遠き将来、空気や水のように本来存在しなければならぬ自由が、そのあるべき姿として実現したならば、最早真実を語るものは英雄どころか不必要になるであろう。然しそれが実現される迄凡ゆる権威に立向う知識人の存在の意義がある。

インテリゲンチァ（以後必要なきかぎり知識人と訳す）が社会学の問題領域に登場したのはそれ程古いものではない。その問題状況の源泉をたづねると、何れも社会的危機の現実を前提として、私は次の諸点が挙げられるのではないかと思う。即ち㈠現在の資本主義社会の危機を階級闘争の危機として捉え、社会主義の担い手としてのプロレタリアートの主張に理論的武器を与える必要（例へばマルクス）、㈡現代社会の危機を自由主義と全体主義の無統一な対立とみて、更に乱立する諸価値観に対し何等かの綜合的統一を与える必要（例へばマンハイム）、㈢現代社

会を大衆化状況として捉え、その危機を分業組織や官僚主義機構における人間疎外の現象にみるとき、その克服と人間性の再建が強調される必要（例へばミルズ）、㈣以上の状況に加えて、第二次世界大戦におけるファシズムの暴威に対してなすすべを知らなかつた知識人への新たな反省とその機能分析の必要（例へばガイガー）、などがこれである。それ故に一概に知識人論と云つてもその問題提出の仕方に種々の伝統や発想の相違があつて、亦むしろ其処にこそ歴史性の意義があるわけであるが、これを文化社会学的な狙いから大別すれば、結局マルキシズムを別として、ヨーロッパ種と云われる知識社会学におけるエリート理論と、アメリカ種といわれるマス・コミュニケーションにおける大衆理論乃至中間階級理論に深い関係をもつていることが理解されるであろう。

私が嘗て論文「知識と社会体制」（「哲学」卅一輯六九頁）の中で知識人の概念に言及したとき、その際の関心は社会体制の変動に伴う知識人の政治的態度の分析にあつたため、その概念構成は充分意を尽さないまゝに、一応論理一貫性を基準とした文化的創造者の概念を用いた。些か執拗の憾みがないでもないが本論文では此の知識人の概念のみを俎上にのせて諸他の文献を参着しつゝ検討しようと思う。云う迄もなく社会学的概念構成は知識人の本質とかそれに対して期待さるべき当為としての形態の追求ではなく、現実の社会を分析するに当つてより明確に説明しうる様な概念を各社会体制の歴史性に則して見出すことにある。もしも知識人を人間理想の具現者のように考えてその定義を求めるならばそれは倫理学の仕事である。社会学の研究が科学者の内的態度として実践的目標に連なる処があるにしても、その現実的対象はやはり社会であり、その中に歴史的地位をもつ人間の究明である事は言を俟たぬ処であろう。

「インテリゲンチャ」という言葉が現われたのはロシアの一八六〇年代で、この名称を最初に使用したのはボボ

ルイキンであるといわれる。（ラズームニク「マハーエフシュチナとは何ぞや」三宅賢訳「インテリゲンチァ」大正十三年。原著者については詳らかにしない）著者によれば恰も此の時代にラズノチーニェツ（当時多くは貴族出身ではあるが上下何れの階級にも属さず、知識はあるけれども財産をもたぬ人々の一群）が一団体として擡頭したとき、その特質に世人の注意が向けられ、ピーサリェフはこれを「思索するプロレタリアート」と名付け、ラウロフはこれに「批評的に思索する個性の集団」とよんだが、これは所謂インテリゲンチァの二つの代表的解釈、即ち社会的経済的解釈と社会的倫理的解釈を表現するものであつた。六〇年以後のロシアの社会思想は、この様な解釈をめぐつて分裂して行つたような観がある。ブルジョワという言葉もロシアに移されると西欧的中立的意味が倫理的否定の概念に変つたのは周知の事実であるが、七〇年代になるとブルジョワジイとインテリゲンチァの関係が問題となつてきて、ミハイロフスキイはこの相互の関係について、ブルジョワジイが一定の階級であるに対してインテリゲンチァはそれと進路を異にする特殊な社会上の力であると考えた。其後種々の論争を経てストルーウェの如くこの集団が何れの階級にも属していないために、たとえそれが知力があり倫理的意義をもつにしても社会経済的見地からみれば零に等しい理想家の一小群として軽蔑的に評価する者もあつた。然しマルクス主義は元来二つの階級以外に超階級的なものを認めない故に結局は再び社会的経済的解釈に還つてゆくのであるが、その解釈にもインテリゲンチァを、㈠プロレタリアート的被支配階級に帰属させるか、㈡社会的倫理的見地から特色づけられる特別な社会階級とみるか、㈢ブルジョワジイ的支配階級に帰属せしめるか、容易に一致点を見出しえない状態にあつた。こゝにマハーエフシュチナ（マハーエフ主義。マハーエフは文名ウォーリスキーともいう）はマルクス主義理論を一方的に徹底せしめ、インテリゲンチァは知識を生産の独自の資本とし、生産及び分配の経過に余剰価値の独占の役

目を演ずる搾取階級とみたのである。即ち資本の独占は少数特権者に知識学問の所有を可能ならしめ、その子弟に高等教育を授けて彼等を支配階級に仕上げる。インテリゲンチァの民衆愛などは単なる仮面にすぎず、それはプロレタリアートに対立するものであり、かくて知識の共有、収入の均等、世襲財産の廃止がその主張の結論となるのである。然し一方ラズノチーニェツの一派は社会経済的解釈を無視し、自己完成を唯一の論拠として、共存の外面的形式よりも精神生活の方が重要事であるという前述の議論と全く反する主張を対立せしめた。結局ラズームニクはこのような対立に綜合を与え、「たゞ社会的政治的理想と哲学的、倫理的、美学的憧憬との綜合のみがロシアのインテリゲンチァの唯一の望むべき道である」と結論するのである。

私は以上を殊更に簡略な素描に終始したが、ロシアに於けるインテリゲンチァ問題は階級闘争と同様に深刻な社会思想の課題であつた。そして個人的な自己完成が社会的な調和に到達するか、或は社会的秩序が個性の調和を齎すかという古くして亦新らしい問題が種々の形で半世紀前に知識人の地位を繞つて論議されていたことを、無益な論議の繰返されている現在吾々はもつと注意して良いと思う。尤も両極端の綜合は観念的には簡単な仕事であろう。然し現実的立場において此の綜合が如何に困難なものであるかを実感せしめられるときに、吾々はその具体的な集群を一層客観的に観察し、その歴史性を曝露し、それを社会学的な文脈の中に体系付けることによつてのみ、漸くその理想に対して第一歩を踏み出すことが出来るのである。

一般にインテリゲンチァという言葉はマルクス主義によつて通俗化された様に思われているが、マルクス自身は知識人論を体系的に展開しているわけではない。吾々はそれを「資本論」や「共産党宣言」等の行文の間に読みとるのであるが、その社会史的形成過程について左の要領よい見取図を借用すると次の様な段階が示される。㈠宮廷

貴族と僧侶による封建的な行政機関にとつてかわる中央集権的な官僚機構の成立。㈡生産力の発展とそれに伴う労働の社会化に応じて、監督および指導の労働の必要性が増大し、産業諸部門における管理指導者の出現。㈢生産過程の精神的力能の手労働からの分離としての技術家の誕生。㈣商品生産の増加とこれに照応した流通過程の拡大は商取引において新しい法律を必要とした――裁判官と弁護士の新しい層。㈤農民層の分解による人口の都市への集中化と苛酷な工場労働は病弱者と流行病を生み、医者への需要を増大させた。㈥これ等の頭脳労働者を生産するための学校の設立と教師の養成。㈦書籍の市場とジャーナリズムの成立は政治権力とは一応独自な立場で活動できる市民的思想家を輩出した。かれらの読者のなかから何倍もの知識人が再生産された。(沖浦和光「マルクス主義におけるインテリゲンチァ論」現代の理論一九五九第三巻)従つて独占資本主義の段階に到つて一層知識人問題が尖鋭化してきたわけで、これに対する解答のオーソドックスはむしろレーニンの時代に求めることが出来るであろう。勿論詳細な概念規定という形においてではない。レーニン「何をなすべきか」第二章二節に、社会主義意識なるものはプロレタリアートの中に自然発生したものでなく、科学の所有者たるブルジョワ知識階級によつて「外部から」持込まれたものであるというカウッキーの言葉を肯定しつゝ、であるからといつて勿論労働者がこの観念を作り上げるのに参加しないという結論にはならぬ、彼等が益々多くこれを為しうる為にはその知識の水準を引上げることに努力しなければならぬと註を加え、知識人を積極的に肯定している。勿論此処に述べられている知識人は知識の所有の有無というよりもその知識が党の方針に合致するか否かが問題なのであつて、知識人至上主義も蔑視もない代りにイデオロギー的多元性は厳しく攻撃されるのである。この様にみてくるとマルクス主義の知識人論が現在の社会学における知識人論とは決して交わることのない他の系統にあることは容易に理解することが出来る。

吾国の論壇で所謂「インテリゲンチァ論争」の行われたのは恐らく昭和初期に「行動」や「新潮」其他の誌上におけるマルキスト及び文士の間に交されたそれが最も華やかなものとして挙げられると思う。勿論この時代の問題意識は現在の状況とは著しく異つてはいたが、この論争は明治以後の日本の知識人の位地を解明するのに役立つた。まとまつた著書としては露語からの飜訳の数種を数えることが出来るが、（例えば向坂・鳥海共訳「インテリゲンチァ」昭五）昭和十年に出版された向坂逸郎「知識階級論」は伏字のため現在読むに堪えぬものではあつてもマルクス主義の立場から書かれた吾国では類の少ない労作の一つである。然し彼によれば知識階級の概念について「知識上又は知能上の優越」（戸坂潤）とするだけでは「財閥運営上の知識」をもつ財界人も含まれてしまう故に納得できないとし乍ら明確な概念規定を行わず、この問題は知識人が知識をもつことによつて今日の社会に一定の特権的地位を与えられていること、知識をもつものが限定された人々であるという問題性にすり変えられているのである。マルクスやレーニンは確かに賃金労働者ではなかつた。然し彼等が知識階級に属すると考えられるのは彼等が××的（恐らく革命的？）インテリゲンチァとしてプロレタリア的意識と行動とをとつているからであるという。この様な考え方は前述の如く多かれ少かれマルクス主義的知識人論を貫流している思想である。

吾々は決して知識人から行動性を奪はうとは考えない。然し一定の社会思想の説く一つの政治目標のみを実践の対象とする者を以て真の知識人と説く立場には賛同できない。確かに行動の自由は「……からの自由」ではなくして「……への自由」として解すべきであるが、吾々の為しうる行為は最大限に「人間の自由」への行動の自由であつて、其の範囲で各政治形態に関する自由な論争を避くべきではないのである。その該博な知識を以てエリート論を展開したボーヴォワールは云う。「真理は一つ、されど誤謬は多し。右翼が多元論を標榜するのも偶然でない。…

…」「いかなる問題についても百人百説だとブリス・バランは断言している。これこそすべての反共理論が切に要請するところのものにほかならない。」(S. de Beauvoir, La pensée de droite, aujonr'hui, 1955. 邦訳名「現代の反動思想」序及び二五頁) 然し吾々はイデオローグを含めて百人百説を尊重する知識人論を考えねばならない。最近よく「進歩的知識人」という言葉が用いられている。これが保守的知識人への対照的な類型として使用されるならばともかく、この進歩を価値的概念としてみるならば素より誤りであろう。一定の社会目標にその政治的志向がむけられているか否かが問題ではなく、その志向がどの位誠実に支持されているか否かゞ問題であるべき筈である。この進歩的の意味は亦行動的と同義に用いて従来の(非社会学的概念である)日和見的な一派と対立せしめられるが、少くとも現在知識人の意義を最初から否定的に貶価する定義も誤りである。「青白い」知識人という形容詞を以て非難する社会的通念は、その歴史的様相の一部のみを以て全体を定義したものにすぎない。フェアチャイルド編の「社会学辞典」(Dictionary of Sociology. ed. by H. Fairchild. p. 160)——この書物は他の個処についてもおよそ役に立たぬものだが——においてインテリゲンチァを「科学、芸術、文化的生活に関する人々の社会集団。或時は社会問題に対する自由な態度、その解決に対する理論的努力に対して何等か品位を毀損するような含蓄をもつカストの意味にも使用せられる」とあるのは当を失した書き方であろう。社会集団と定義した処にも既に問題があるが、もしその価値を傷つける様な定義を挙げるならば、同時にこれに一層積極的意義を与える概念も尚更説明しておかねばならないであろう。

独逸形式社会学の退潮に代つた文化社会学では、マックス・シェラーにせよアルフレッド・ウェバーにせよ何等かの形で知識人問題に関心を寄せ、特にシェラーのエリートに関する有名な論文は現在尚精読さるべき価値をもつ

ている。然しこの問題を最も社会学的に詳述し、而もこれを知識社会学の帰結に持込んで危機的社会の教育的及び計画的主体たらしめたのはカール・マンハイムである。彼の立場についての詳細な説明は此処にすべて省略するが、マンハイムは知識人の類型について次の様な四つの分類の仕方から提示した。即ち、㈠肉体的職業と知的職業、㈡自由職業と一般の商売、㈢教養のある者と教養のない者、㈣大学教育を受けた者と受けない者、の対比によつて夫々意義あるアプローチが為されるのである。(K. Mannheim, The Problem of the Intelligentsia, in "Essay on the sociology of culture" 1956. p. 111 f.) ㈠は社会的階位には関係なく、たゞ職業を遂行する手段を指示するのみである。昔は肉体的、知的職業の差異は同時に社会的評価、即ち階位の差異を示した。然し民主的社会ではこの様な考えからは自由になつてきている。分業の社会では仕事の特殊な性質は漸次職業の属性となつて、地位の象徴となることは益々少なくなるのである。㈡知的職業の評価の第二段階は社会的階層に関係して自由職業と商売となる。自由職業の金銭的配慮からの自由はこの職業に付いている権威の重要な性質である。然しその高い道徳的評価は屢々、その威信が彼等の清廉な仕事自体から生れるのではなく、それを可能にする社会的地位から出るのだという事実を背後にかくしていることに注意しなければならない。この二つの分化は現代官僚制以前に社会的な事柄をすべて官吏の手に委ねてしまうやり方の背景を作つている。㈢教養のあるものと教養のないものという区別は南米や独逸の小都市では今尚その意義をもつている。「教育ある」という言葉は医者、法律家、行政官、商人及び工場主の様な知名の人を含み、それには教養、階位、収入が物を云う。それは同様な社会的礼儀や生活様式に基礎付けられて居り、この社会的共生は同質的な文化を産み易いのである。㈣上記の「教養ある」という言葉は絶対国家や官僚主義の成立と共に次第に通用しなくなり、新しい体系による独自の基準が生れて来た。社会的尊敬という

以前の区別は大学を卒業したか否かという区別に代えられるようになる。教育的訓練それ自体の標準化は産業社会に於いては不可避のものと云わざるを得ないのである。

以上述べた様な四つの類型は夫々の社会的類型に相応して用いられる有効な概念であるが、それらが現代にも多少づつとも存在している事は妨げないし、又それらを以て知識人の真の形態であると断言することも出来ない。此の基準をみてゆくと、それは精神文化乃至教育に関与しているか否かが問題であつて、如何に関与しているかや文化の種類は問われていないのである。マンハイムは此の「インテリゲンチァの問題」以外にも「イデオロギーとウトピー」の第二篇や「人間と社会」等の著作で知識人の課題に論及しているが、それらに述べられているのは彼の超党派的な全体観察を為しうる自由に浮動する知識人であつて、それは多分に政治的乃至社会科学的知識人のみを対象としている様な処があり、具体的には大学教授を念頭に置いているとさえ言われているが、彼の論旨は知識人に積極的役割を与えた典型である。

これに対しジョセフ・シュムペーターが「資本主義、社会主義、民主々義」の第十三章に於いて展開した知識人論は知識人を消極的に定義したものゝ典型であろう。(J. Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy. 1942) 彼は知識階級が農民、産業労働者と同じ意味で階級ではないこと、又高等教育を受けたもの、自由職業に就いているもの、筋肉労働への対比、文筆家という様な概念が何れも狭きに、或は広きに失することを指摘し、結局知識人が弁舌や文筆で言葉の威力を発揮する人間には違いないのだが、彼は実際の事件に直接の責任をもたぬこと、実際の経験から得られる「なまの」知識をもたぬこと、その批判的態度等を以て定義づけられると考えた。此の象徴的な範例は古代ではソフィスト、近代ではルネサンスのヒューマニストである。(例えばアレティノ)。彼等

には火烙りよりも名誉や安楽の方が相応しかつた。現代資本主義の発展は労働運動を生み出したが、それは知識人の創造物ではない。たゞ彼等はその政治運動に理論やスローガンを与え、参謀となり顧問として参与する。然し労働者は知識人に対しては乗り越え難い懸隔を感じている。而も批判的知識人は彼等に本当の権威をもたず、内心びくびくし乍らお世辞を云い煽動し、大衆のために行動する。それは彼等が以前に彼等のパトロンに仕えたのと同様なのである。

知識人に関するシェムペーターの概念構成はガイガーが次に述べる書物の中で厳しく批判している様に、特殊な問題設定の必要上作り上げた消極的なものであつて、其の用語乃至述べられた事実が必ずしも当を得たものとは思われない。知識人が批判的、破壊的、社会的厄介者として現われることがあるにしても、現代の権力社会に知識人論の再燃を来たしている問題状況は、明らかにその一面が反つて一層積極的なものとして評価され始めていることを語るに充分なものであると考えねばならぬであろう。

テォドール・ガイガーの著「社会に於ける知識人の使命と地位」(T. Geiger, Aufgaben und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft. 1949) については既に私の旧稿に於いて幾度か触れる機会があつたので、此処に必要な限りでの論旨を要約しよう。彼は知識人としてのインテリゲンツを代表的文化財の創造者として、その文化財の消費者たる教養人 (Gebildeten)、及びその文化財の利用者たる大学卒業者 (Akademiker) と区別する。この概念規定に於いて彼は文化を精神文化に限定する独乙文化社会学の伝統に立つている。次いで中世より現代に到る歴史的変遷の中で知識人の文化創造的役割が辿られるのであるが、文化の創造と享受とを独占した中世の僧侶階級に代つて、近代国家の成立と共に政治的権力に対抗して国家の機能を批判することによつて創造的役割を果した

文化階層に新しい知識人の誕生を見るのである。此の政治的権力に対する知識人の在り方には次の四つの可能性が考えられる。即ち㈠政治的実践と文化的創造の両立する場合、㈡政治的権力に服従しつゝ文化的創造をなす場合、㈢合法的には権力の奉仕者となる場合、㈣権力の批判者として文化的創造をする場合、がこれである。㈠は知識人的政治家の例にある様に必ずしも思想家が政治的権力によつて圧迫されない場合であり、㈡は支配階級の意向を礼讃し乍ら結果的には優れた文化価値を生み出す場合であり、㈢は客観的には自由の立場にあり乍ら結果的には支配者に利用される、例へば原子物理学者の如き例であり、㈣は社会科学的知識人の最も重要な課題であるが、権力的イデオロギーの破壊を通して新しい文化価値を創始する場合である。然しこの新らしいイデオロギーもやがては別の政治的権力者によつて実践の具に供せられる矛盾の可能性はもつているわけである。

ガイガーは亦知識人の社会構造に於ける歴史的な変遷をジェントリー的知識人、市民的知識人、プロレタリア化的知識人、民主化的知識人の段階を以て説明している。この社会史的類型の第一は仏英のルネサンスの類型であり、これは現在の英国にも痕跡を留めている。彼は身分に相応しい好事家として市場性からも遊離して居り、自由奔放な生命力と知的な職業的厳しさに欠除している。市民的知識人は欧洲の十八、九世紀の精神生活を支配したものでその基調はかのヒューマニズムの使命であつた。彼等は市民社会の中間階級からの出身であるが、次第に経営者、大学出、官吏、自由職業によつて担われるようになつた。尤も市民の概念はその実体が歴史性をもつているから、その限り流動的であるが、プロレタリア化的知識人という場合にも市民社会機構の矛盾から貧困化した知識人及びプロレタリア陣営の味方に立つ知識人という概念も包含される。今日民主々義諸国では万人に大学教育を受ける途は開かれているのであるが、こゝに現代社会に対処すべき使命が考えられるわけである。ともかくガイガーは

知識人を形式的な知識の所有者としてではなく、代表的文化の創造者としてその内的機能を重視して来た処に注目すべき把え方がある。そして彼は権力の批判について更に分析し、知識人の批判が社会秩序自体の欠陥への批判、権力者の理論批判、権力のイデオロギー的宣伝への批判を区別していることも正鵠を得ている。然し彼の理論には知識人と大衆との関係が明確でない。後段に示すように現代の大衆化状況との結び付きが尚検討を必要とするであろう。

ガイガーの定義はかなり広く支持者をもち、特に独乙では何等かの形で引合いに出され受け入れられている。例えばシュテファン・ランブレヒトも最近の著書の中で（S. Lambrecht, Die Soziologie 1958. S. 362）知識人をエリテとし、且代表文化の創造者とする見解を肯定し、たとえこの概念が狭義に過ぎるにしても吾々はガイガーに於いて広汎な層に妥当する知識人の本質を見出しうると考えている。亦ガイガーは知識人の運命をルネサンスの純粋に美的な類型から自然科学時代の合理的類型にまで辿り、それはバロック時代に個人的従属から解放され、その名称は現代文化の中で合理的精神の支配を益々強調する様になつたと述べているが、彼もこれを認めて結局、「人間存在の合理化と意義とを凡ゆる領域の中で押し進めるのが知識人の課題である」と述べている。彼の論議は余り厳密であるとは思われないが、エリートを機能概念として把えていることは肯定出来よう。

ルネ・ケーニッヒにおける知識人の考え方も大体ガイガーを踏襲しているように思われる。（R. König, Soziologie. 1958. S. 140）彼も先づインテリゲンツを教養人（Gebildeten）と区別する。此の場合の教養（Bildung）は獲ち得られるものであつて楽々と得られるものではないのだが、教養人はかゝる文化財に関与し、それは以前には屢々学者、法律家、医者、高級官吏等の学識ある集団と混同されていた。これは又本来の大学卒業者（Akademiker）

とも相違がある。大学卒業者は教養人とも他の職業集団とも結びついて居り、それは経済の発展や官僚化の結果として著しく増大して来たものであつた。本来の意味での知識人はたしかに一定のアカデミックな職業から生起するが、自由職業と完全に同視することは出来ない。知識人に本質的なことは彼が合理的な理性、啓蒙、社会批判の代表者として指導的に現われることである。これは純粋な態度の問題であつて、如何なる特殊な教養をも前提するものではない。特に現代の社会科学の発展と共に知識人の批判は益々広義の社会批判の性格を帯びて来た。従つて知識人の本質的機能は人間性の理想の奉仕に於いて現存権力の批判にある。それは所謂右翼陣営に対する様に、左翼の陣営（それは右翼よりも一層執拗である）にも向けられる（レイモン・アロン）。亦ケーニッヒはエドワルド・シルズにならつて最近の原子物理学者の問題に言及し、彼が共産主義の協力者として国家秘密を洩らしたことについて、共産主義が人類をこれ迄長い間裏切つたことに責任を感じないものだと批判している。右翼と同じ様に左翼に対しても批判するこの立場はマンハイム的な超党派の思想に近く立つものと思われるが、これは一般に社会科学的客観性を強調するものと考えてよいであろう。然しこゝでもやはり余りに政治批判に片寄りすぎてはいないだろうか。西欧諸国はともかく政治的後進国に於ける問題が尚吾々に残されている様に思われる。

ちなみにセリグマン編の社会科学辞典ではロベルト・ミッシェルスが次のような知識人の定義を試みている。(R. Michels, Intellectuals. in Seligman's Encyclopaedia of Social Science.) 知識人とは知識をもつている人々、或は狭い意味では反省や知識に基づいているそれらの判断が、知識なき人々の場合におけるよりも、感覚によつて動かされることが少ない人々のことをいう。尤も道徳的美的発展は知性と結びついてはいるが、これは必須の条件ではない。最も典型的な知識人はアカデミシアン及び高い教養をもつ学校教師であるが、この意味でのみ定義

することは良くない。「半分」教育をうけたもの、「間断なく学ぶもの」、独学者も、彼等が知識の素材を集め、知的労働に携わる限り、すべて知識人である。而してその機能として挙げられることは、彼等が社会生活に特殊な役割、即ち彼等の知的活動の自由が妨げられるときには現在秩序に対して反抗しようとすること、亦知識人は国民意識を刺戟するのに重要な役割をもつことなどが挙げられている。このミッシェルズの論文は詳細な文献目録を以て知られているが、知識人も間断なく学ぶものとして規定するとき（その内的態度に注目している点にガイガーを想起せしめる）この様な内的態度を如何に測定するかに就いて困難があろう。（この点ガイガーの文化創造の概念も同様である）従つて逆戻りするようであるが次に述べる様な知識人の外的形式に注目する解釈も生れるわけである。

知識人の概念と類型についてアントニオ・グラムシは次の様に考えた。（A・グラムシ著作集第三巻「知識人と文化組織」。邦訳「現代の理論」一九五九 No. 3 所載）さまざまな知識人の活動のすべてをひとしく特徴づけ、同時にその活動と他の社会諸集団との活動を本質的に区別する為の統一的基準は何か。他の多くの方法論的誤謬はこの区別の基準を知識人の活動の内部に求め、社会諸関係の一般的総体の中でこれらの活動がおかれるに到る諸関係の体系全体を求めることをしなかつたと彼は述べている。こゝに提出された概念は有機的知識人と伝統的知識人の区別である。有機的知識人とは経済的生産世界における一つの本質的機能という新たな土台の上に誕生する知識人である。こうして例えば資本主義企業家は自己の誕生とともに工業技術者、政治経済学者、新らしい文化の組織者、新らしい法律の組織者等をつくり出す。これに対して伝統的知識人とは「それぞれの本質的社会グループ（他の諸階級に対して指導権をもつている階級）が、それ以前の経済構造からその構造の一つの発展の表現として歴史に登

場したとき、少くともこれまで展開されてきた歴史の上ではそれ以前から存在した知識人諸部類、というよりはむしろ社会政治諸形態の最も複雑で根本的な変化によってさえ途絶えることのない歴史的連続性を代表するものとして現われた知識人諸部類」をさす。例えば聖職者、独自の特権をもつ法律家、行政官、哲学者などがこれに相応するわけである。

たしかに吾々が知識人という言葉の意味の最大の限界を求めようとすれば心的態度の捨象は止むをえないが、それだけに独自な本質性が失われる。私はやはり知識人の概念規定にはその内的態度を無視してはならぬと思う。古い時代の人間がその古い枠の中から新しい時代への指標を考え得ることは充分可能であり、且それが現在の吾々に或る意味で必要なことが決して少なくないであろう。

最新のドイツの社会学辞典（Wörterbuch der Soziologie, herausgegeben von W. Bernsdorf und F. Bülow. 1955）でアルフレッド・フォン・マルティンはインテリゲンツの類型を次の如くに述べている。彼は知識人を文化的知識人と技術的—組織的知識人に区分するが、この二つの基本類型は人間の二つの側面、即ち知性人（ホモ・サピエンス）と工作人（ホモ・ファーベル）の区別に基づいている。元来人間はこの両者をもつているのだが、この第一の類型たる文化的知識人は人間の存在水準を高めようとする。彼は文化を豊かにし、創造的仕事によつて人間に感動を与える。そしてその仕事は社会の精神的運動に新らしい認識や道徳を与えて世論を喚起する。これに対して第二の組識的知識人は技術的に精密な創造に奉仕する。彼は従属関係からは自由に研究することが出来るが、技術的進歩は常に経済的政治的権力に適応してそれを何時でも利用される立場に立つのである。これは第一の文化的知識人が常に自由を要求し権力に対し批判的立場にあるのとは種類を異にしている。

右の様な類型の区別は些か常識的な類型の様に思われるが、知識人を直ちに社会批判者として考える社会科学的範疇の優位から来る無理を救うのに役立つであろう。知性人工作人という哲学的人間学の臭味は気になるが、現実理解の概念構成に役立つ限り許されねばならない。然し文化的知識人の範疇は余りに包括的であり、その中で少くとも社会科学的なものと美的なものとの区別が必要であると思われる。然しそれだからといつて決して芸術家や建築家が自己の職業内に留まり、政治や社会問題に無関心であつて良いわけではなく、その様な時代は既に過ぎ去つた。そしてこのことは技術的知識人に対しても同様であろう。彼は自己の技術的発明や発見が自己の判断によつて権力者に悪用されることを未然に防止すべき充分な理由と義務を社会に対してもたねばならないのである。権威の所在を知らぬ優れた頭脳の悲劇の多くはこゝに生れる。

知識人の行動と不決断性の両面を人間のドン・キホーテ型とハムレット型という人間類型から要領よく説明しているのに戒能通孝の評論集「インテリゲンチャ」(昭廿七要書房)がある。「頭の中に考えられた正義を絶対化し、肉体と離れえない様な正義であるかの如く勇気づけるとき彼はドン・キホーテ的であり、頭の中に考えられた正義をもう一度反芻すべく努力するとき彼はハムレット的である。」この性急的行動的類型と不決断的日和見的皮肉的類型の対比は特にこと新しいものではないが、彼が現代社会における知識人の生活関連をこれと結びつけている処には興味がある。元来目的自体の興味に生きる知識人の私有する生産手段は、それ自体としては交換価値を有しないし、彼は何等かの成果をうるよりも知識や技術そのものの蓄積に期待をもつ。老大な学殖をもち乍ら、それを書物にすることもなく一生を終る教授などについても、それをあながち彼の怠惰のみに帰すことは出来ないであろう。彼はその学殖を埋れさせるのを希望するわけではないが、プロセスを抜きに結論としての商品のみを売る商人

とは自ら異つているのである。然し資本主義社会では、掌ての宮廷附属物であつた御用学者が王侯の御前以外では自由な時間をもつていた様には、彼の自由は許されなくなつて来た。知識人の地位が高く評価されるようになつたその代償として彼は資本主義機構に何等か役立ちうるものとなるように要請されるのである。彼が自分の専念する仕事自体を商品化しうるのはむしろ稀な幸福な場合であつて、第一の類型たる多くの大学卒業者はその学識を資本家的制度の擁護、その理論的代弁者となるのである。第二の類型は生存のための労働力と自己の知識的蓄積を分離しようとするものであり、彼は直接に権力闘争に参加するを好まず、その態度はハムレット型に近づくのである。第三の類型は自分の知識や技術をそのものとして買取つてくれる階級の直接支配を望むか、自分の知識以外によつて生活するのを拒否するために極めて性急化したドン・キホーテ型の知識人である。以上の類型は換言すれば保守型、急進型の知識人として表現できる。たゞ此の書物は社会評論乃至文化論として書かれている為に社会学的概念構成としては不備であり、保守的、急進的という言葉は更に分析さるべき余地を残している。然し本質的にこの様な志向を以て知識人の類型を考える立場はかなり多く見出すことが出来る。

試みに「社会学辞典」(有斐閣一九五八)の当該項目を開くと、日高六郎の執筆になる定義と類型が掲載されている。此処ではインテリゲンチャは広義では「知的或は精神的労働を提供することによつて生活する社会的階層」として、更に狭義では「なんらかの意味で政治的社会的或は文化的責任を自覚した良心的知識人」として定義されている。吾々にとつて重要なのは狭義の定義であるが、定義として再び知識人を持出すタウトロギイは問わぬとしても、自覚的良心的人間という問題の樹て方が客観的社会学的定義として充分であるかどうか。更にこの類型は権力と大衆との関係から次の四つに分類されている。即ち、㈠権力と結着し、大衆から断絶している知識人、㈡権力

からも大衆からも断絶している知識人、これは更に(a)消極的、逃避的、小市民的立身出世型と、(b)積極的なそれ、即ち頭だけ権力に抵抗して大衆に投入せぬ型に区別される。㈢権力に抵抗し、大衆に結着する知識人、㈣権力と大衆とに結着する知識人（これは社会主義的体制を前提としている場合）。

この類型の分類はその基準としての権力と大衆の概念が些か曖昧であり、且イデオロギー的である。恐らく資本主義社会に於ける政治的経済的圧力と抑圧されたプロレタリアートを念頭に置いてのことであろうが、大衆という社会学的概念はプロレタリアートとは同一でなく、権力執行者をも含めても成立つ概念である。又この権力を非合法的圧力とみる場合にその中には権力化した大衆をも考えることが出来る。知識人の課題は大衆と結びつくことだけなのか、かれは社会主義体制では社会批判の機能を失うのか。権力を度外視して社会主義体制は考えられないであろう。知識人の機能は支配層の権力の逸脱をも含めて民衆の非合理的思惟に対する知的啓蒙や文化創造にある。特に日本の場合、批判の対象は支配層の権力と共に、これに迎合する民衆の思惟自体の中にも存在するのである。

ヨーロッパ系のインテリゲンチァ論とは異つた問題の提出の仕方であるが、ライト・ミルズの「ホワイト・カラー」(W. Mills, White Collar. 1951) 第七章における知識階級論はその概念構成について吾々の当面の課題に役立つものをもつている。彼も知識人を定義するに当つて社会的地位ではなく、その機能や主観的性格に注目した。何故ならば彼等には共通の起源や社会的目標もなく、地位、収入、職業に統一性を欠くからである。知識人の特長をミルズは次の如くにみている。即ち、㈠彼等の生活は思想と無縁ではなく、常に思想を追い求めていること、㈡彼等は自主的思想を持とうとし、実利主義や従順主義には永久に反抗すること、㈢支配階級の政策に賛成か否かは問題ではない。重要なのは表現の形式であつて、権威を肯定しようが否定しようが象徴的次元で自主的に論ずればよ

いこと、等に要約することが出来よう。彼によれば知識人が真の自由を得ていたのは西欧の十八世紀であつたが、廿世紀の米国ではその自由は全く破壊されつゝあるという。ミルズの概念構成は確かにこのような状況、例えば戦後のマッカーシズムの旋風、そして特に官僚主義化しつゝある現在の大衆化状況を念頭においてのことであろうと思われる。官僚主義的機構は知識と技術をもつ凡ゆる知識人を要求し、経営者と知識人との関係は益々密接になる。而も官僚主義はその運営のみならず、そのイデオロギーの正当性を防衛する任務を知識人に課すのである。伝統的な価値観念が破壊され、それに代る新しい拠り処を大衆が求めるとき、これを納得せしめるのが知識人の課題なのである。ところが結局は官僚主義的イデオロギーの代弁であるにも拘らず、非人間的な権力機構の中に生活していると誰が自分の主人であるか簡単には分らないので、知識人は自分の主張が客観性を維持しているかの如くに錯覚するのである。かくて彼等は益々小市民化し、政治から自己を疎外する。大学においてすら教授は純粋科学の名の下に注意深く安全な講義を撰ぶようになる。これは科学の没価値性とは縁のない退却に他ならないであろう。然し当に官僚主義の無責任性の上に成立つ政治経済への人間的反応が現代の良心的知識人の悲劇の本質なのである。静かな思索よりも性急な行動の要求の前に危機に瀕する個性、これが現代生活の一般的な欲求不満の実体であつて、こゝから道徳的無防禦や政治的無能が生み出されたのである。

ミルズの論議は嘗て自由であつた知識人が現代の巨大な官僚機構の中に無力化され合理化される過程を描き、その極めて悲観的な運命を結論している。だが当にこの悲劇から逃れうる途は此の機構分析を通しての科学的自覚以外にはありえない。彼の知識人の特長を示す自主的思想には他の論者の強調する批判の性格のかげが薄められている感がないでもない。これは彼の知識人論が知識社会学からの発想でないことに基づくのであるが、ともかく知識

人が階級でも階層でもなく、従つてそれを一定の心的態度から規定されねばならぬとなると、社会的外的地位からこれを基礎付けようとする試みは大した価値をもたぬことになろう。嘗て大道安次郎の挙げた「横と縦からの」分析は後者の典型的なものであつた。（三木清編・現代哲学辞典三七頁）略記すれば次の如し。

〔横からの区別〕（A）知的労働者としての俸給生活者の群（私的経営体の使用人、公的機関の使用人）（B）狭義のインテリゲンチァ（自由職業者の群、例えば教授や弁護士、作家や評論家。及び学生層）

〔縦からの区別〕（A）上層（高級の官吏、使用人、上級の軍人）、（B）中層（学者、教授、教師、弁護士、技師、医師、中級の官公吏、使用人、芸術家、ジャーナリスト、学生）、（C）下層（下級の使用人、下級の官公吏等）

以上の表には所謂新中間階級と云われるすべてが含まれている。そして明らかに「インテリゲンチァは旧中間階級と区別して新中間階級とも云われている」と明記されている。然し新中間階級は社会的階位の区別であつて、それが即ち知識階級ではない。尤もこれの書かれたのは戦時中の文献に乏しい時期であつたが、それだけに日本における知識人の使命の混迷の時代であり、その使命をせいぜい時代の風潮の無批判な追随を避け「世界史的意味」の再発見、「自己の思想的現実、日本の行動的現実の批判的肯定」（三木清）という抽象的言辞を以て自己偽瞞から逃れねばならなかつた時代であつた。勿論知識人の概念的枠組に歴史的実験の場を素材とし、その問題性が歴史的状況の内に措定されることは望ましいことであるが、政治的当為が科学的対象を引き廻すことの許されぬことは言を俟たぬであろう。それだけに知識人に関する論議は吾々の置かれている状況の曝露、社会体制への科学的反省、ミルズが論じた様な大衆社会の検討が益々不可欠なものとならざるを得ないのである。

今日吾々の社会を民主々義的社会とか階級社会とか大衆社会とよぶとき、吾々は大衆の概念を民主化の主体とし

ての担い手や、或はプロレタリアートの概念と同視してはならない。即ちこゝに知識人と対比される大衆の概念は未来の理想を担うべき集団としてではなく、二十世紀初頭以来の資本主義的機械化や官僚化、或はマス・コミュニケーションの増大に伴つてそれらにその心的態度を深く規制づけられた大衆化状況下の一群の心的機能を指す概念である。それは未組織集団として社会学的には群集や公衆と対比されつゝ、集団的接触においては間接的、その結合態度においては情緒的（感情的）なものとして一応は規定されうる。此の意味での大衆は支配者の意のまゝに暗示によつて引き廻される主体性のない浮草のようなものと見做される。確かにその一面としては真実であろうし、それ故にこそ最近個人的主体性を復活すべき小集団や組合の意義が強調されてきたのであつた。就中この主体性の問題は現在の歴史的状況においては政治的イデオロギーの問題として多く捉えられている。政治的イデオロギーの担い手としての政党は此の大衆化状況を利用し、教育やマス・コミによつて世論に一定の動向を指示し、それを全体的意志に迄高めようとし、大衆は無批判にその圧力の中に融け込んでしまう傾向をもつ。然し乍らその反面、現在の大衆について次の点が注意されなければならない。元来大衆を含む未組織集団はその意識性、組織性、持続性を欠くが故に本来の組織集団と区別されている。然し未組織集団は全き意味での無組織乃至非組織ではないのであつて、その中にやがて組織集団になりうる可能性をもつが故にこそ未組織なのである。大衆化状況もやがてそれが固定化するに従い、そこには嘗て命令した主人に対立し、逆にこれを命令する力をもつようになる。宣伝広告を以て大衆を操つていた産業資本主義の企画家はやがて逆に大衆の好みや意図に自己の企画を合せねばならぬようになり、政治的イデオロギーを押付けていた政党は逆に大衆を政治的圧力集団と感じ、政治的志向をこれに合せつゝその組織を合理的に容認する段階にまで立到つている。吾々は此処に下からの新しい権力の誕生をみることが出来

る。知識人がその知性による非合理的な権力の批判をその最も重要な機能とするならば、そして彼自ら大衆の一成員であるからには、この問題状況を決して無視してはならないであろう。

以上の諸状況と共に特に吾々の注意しなければならぬことは吾国における知識人問題を吾国の独自な社会的発展や大衆化状況の中に求める課題である。これは本稿とは別に稿を改めねばならない様な尨大な資料とその分析を必要とするものであるが、これは欧米における概念構成をそのまゝ吾々の社会の中に持込むことによつて生ずる誤謬や欠陥を医す為にも不可欠なものであろう。概括的にその二三の点を挙げれば、真正な市民革命を経験しなかつた吾国の大衆化状況は公衆の時代を経た欧米のそれと趣きを異にして、一層権威主義的性格を強くもち、亦宗教的支柱を欠いた市民大衆は人間的自由を実感する機会を遂にもたなかつた。此の様な事情に於いて吾国の知識人の対立すべきものは、左右何れの政治的思惟以前の段階として、大衆の非合理的思惟自体に存在するのではないだろうか。何故ならば例えばファシズムの脅威にしてもその原因は一指導者の恣意というよりもむしろその宣伝に合理的批判を与えず感情的盲目的に追従した大衆の側にあつたとみることが出来るからである。更に吾国の過去の身分的秩序は未だに世襲的権力を抜き難きものにしている。上からの民主革命は一応観念的には権威の所在の転換を教えはしたが根本的な解決には到らず、権威の座は精々大衆的接触を可能にするマス・コミュニケーションの花形や、一企画者の創造する架空な英雄主義に移されたにすぎない。而も前述の大衆的圧力が益々この傾向を助長するものとなつている。尤も以上の状況は広く現代社会一般に妥当する事柄であつて、通俗的な云い方であるが、もしも近代の意味が凡ゆる束縛からの人間の解放であり、近代的科学もこれを背景にして成立したとすれば、現代において過去の教権主義や封建主義の権威に代つて現われた種々の新らしい権威を曝露しつゝ、現代に即した主体性の確立

に努力することは当然凡ゆる科学の使命であり、知識人の課題となる筈である。

所謂「知識の為の知識」「学問の為の学問」という様な概念は、社会学的にみれば高度資本主義下における機械化の抽象的構成や、機能的合理性の極端な発達の結果形式自体が目的化される状況に則応するものである。それが倫理的に是認されるのは此の概念が主体的自覚によつて内実されている場合に限られるのであつて、それ故にこそ人間の実質的合理性が生々と作用していた十九世紀にヒューマニズムの指導理念となりえたのであつた。然し現在「知識の為の知識」が極端に形式化されることによつて（特に社会科学の領域に於いて）、反つて知識の純粋性の名の下に一定の権威を肯定する偽装となつていることに注意しなければならない。そして「討論の為の討論」という知的訓練の為の論理が恰も知識人の象徴の様に考えられて来た処に、最高の権威の所在を忘れた人間の機会主義的なイデオロギー的変節を容易ならしめている理由が存在するのである。

既に述べた幾多の代表的論述を俟つ迄もなく、知識人が何等かの種類の文化活動に関係するものであること、而もそれが単なる文化財の享受者でなく、新しい文化財の創造者であること、そしてその基準は知識所有の多寡や資格によるよりも、一層その内的態度の如何に関係するものであることは明らかである。而してその態度とは本質的には彼が自主的であり、自己の文化活動に対する一定の理念をもつているということ（たとえ知識の成果よりも蓄積に関心をもち、文化創造自体に興味をもとうが、或は自己の文化活動を一定の社会目的に方向づけようが）である。もし吾々が知識人一般に就いて定義しようとするならば精々以上の如き規定の外に出ることは出来ないであろう。然し知識人の概念を更に具体的にする為には、その知識のもつ独自の形式、即ち知性、感情、技術等に従つて社会科学的（乃至哲学的）知識人、美的知識人、技術的知識人に分類しなければならないであろう。即ち、㈠社会

科学的知識人は論理的知性を以て自己の立場から特に非合理的思惟に対して批判を加える。相互の立場の差異を超えて彼等に共通するものは、知性を蔑視する権力に対して最も忌むべき敵対者をもつていることである。㈠美的或は芸術的知識人は自主的な感情をもつて社会的文化を指導する。彼等の間には真か偽かは存せず、新らしい美の領域即ち精神的覚醒か迷妄かが存在する。従つて現代社会に於いて決して政治的に無関心ではいられないにせよ、彼等の批判は政治の理論的批判に対してではなく、政治的利害関係に結果する偏見への批判であり、個性の創意を脅かす俗物主義の圧力に対する批判に向けられるのである。㈡技術的知識人もその自然科学的研究の本質から云えばイデオロギーからは中立であり、研究の自由が保証される限り政体の批判は第二義的なものに属する。彼等は内部の蓄積としての自己満足よりも実験を通しての常に新らしい成果を追い求める点、美的なものよりも一層プラグマティックな傾向をもつ。然しその成果はやはり彼自身のものであつて、それが彼の技術観に反して悪用される時はその権力に立向はざるを得ないであろう。

従来の知識人論の多くは社会科学的知識人を以てこれを代表せしめ、現存政治形態の批判をその主要課題とした観があつた。これには確かにマルクス主義的インテリゲンチァ論の意識的或は無意識的影響を認めてよいであろう。亦事実、現代の問題状況が過去にその比を見なかつた程あらゆる領域に亘つて政治性社会性を要求し、前世紀的個人主義の枠内に安住し得ぬ社会体制を前提とする以上、この視点から知識人分析の手掛りを把えようとすることは充分の理由がある。然し現代社会の価値観の分裂や大衆化状況は、知識人の自主性や主体的統一を脅かす種々の権力を生み出す結果になり、これを無視して政治的権力のみを挙げるのは一方的な誹りを厄れぬであろう。亦知識人の類型を考える場合、権力に対する彼等の可能性として多くの論者が権力服従型を挙げるが、これは最初に知

識人の批判性や自主性を定義する以上無用な類型である。問題はむしろかの服従という言葉が合理的な支持を与えているものか、或はより一層高い理念の故に無関心として現われているか否かにある。マルキシズムがこの目標にある者のみをインテリゲンチァと呼ぶのとは別の意味で、私は権威主義的人間を、それが如何なる文化を創造しようとも、知識人とはよばない。それは私の用語では文化人に相応する。(ガイガーの知識人と教養人の区別と比較して戴きたい)従つて知識人の概念は人間個人の中に真の権威が求められる様な時代に到つて一般化されたと考え得るのであつて、伝統や慣習の権力や金権的権力を背景にする者、似而非宗教人の凡ゆる文化活動はその内的態度の故に知識人から区別されるのである。従つて吾々が知識人の内的態度に関する類型を分類するならば、それは㈠社会の凡ゆる意味での権威に抵抗するか、㈡過去の権威の中に現在に生きる意義を見出して形式的にこれを支持するか、の二つに区別することが出来る。此の場合前者が社会文化批判の形であらわれる急進主義であるとすれば、後者はその批判者を批判する形であらわれる限りでの保守主義である。この両者は政治的領域のみならず、凡ゆる文化的領域、芸術様式の中に見出すことが出来る。この両者を綜合して中立的普遍的視点を求める知識人的立場(マンハイム)は適当ではない。何故ならばこの二つの立場は次元の異なる真理観の下に立つて居り、現在の社会を自主的に思惟する知識人の類型を代表しているからである。蓋し前者は凡ゆる既存の権威を切断しようとする勇気に、後者は歴史的現実を主体的に堪え忍ぶ勇気に基礎づけられているのである。

(註) 最近吾国で文芸評論家の立場からも盛に知識人の問題が論ぜられている。その二三を挙げれば、中村光夫「知識階級」(日本文化研究第六巻 昭卅四)、堀田善衛「日本の知識人」(現代思想第十一巻 昭卅三)、久野収其他「知識人の生成と役割」「近代日本思想史講座第四巻 昭卅四)小松攝郎「日本の知識人」(昭卅二)等。但し本稿に直接の関係はない。